

イギリス環境教育論の原型

——バトリック・ゲデス再考——

今日、〈環境と教育〉との関係を教育本質論にたちもどって再検討し、環境教育の理論を構成することが、教育社会学研究の一環として求められている。⁽¹⁾

本稿では、すでに一世紀あまりにわたって環境教育実践の経験を有するイギリスにおいて、その開拓者とされているバトリック・ゲデス（一八五四年—一九三二年）の理論を素描し、それを「イギリス環境教育論の原型」として再評価するための基本的な視点を提示したい。

I

一九一五年に出版された『進化する都市』の「都市の研究」と題する章において、ゲデスは次のように記して

いる。

「都市研究の問題は、三〇年あまりにわたって私の心をとらえて離さなかった。本質的にさまよえる学徒である私の個人生活の大部分は、都市の進化の秘密を探求し、それを解き明かすための手法を見出す努力を日夜更新することにあてられ、費やされてきたのだ⁽²⁾た。」

スコットランドに生まれ育った彼は、ロンドン王立鉱山学校のトマス・ハクスリの下で生物学を修め、やがてユニバーシティ・カレッジ・ダンディにポストを得て植物学を講じてきた。社会学者・都市計画家として知られる彼の「都市の進化の秘密の探求」が「個人生活の大部

安 藤 聡 彦

分」によらなければならなかったという回想は、そうした彼の経歴のユニークさを物語っているだろう。⁽³⁾

実際、都市にかかわる問題は、一八八〇年代の初めにエディンバラで職業生活を開始して以来、ナチュラリスト・ゲデスの心を奪ってしまったように見える。彼は、オールド・タウンと呼ばれるスラムに妻のアンナとともに移り住み、その物理的・文化的環境の改造——都市美化や景観保存のための運動、労働者住宅やエディンバラ大学の学生寮の整備、文化・レクリエーション施設の設定やそれを用いての子どもや成人の教育活動、等——のために、文字通り東奔西走してきたのだった。“Vivendo Discimus”——「我ら生きることによって学ぶ」——をモットーとした彼にとって、それが研究のやり方だった。

では、その結果彼が行きついた「都市の進化の秘密を解き明かす手法」とは、いったいどのようなアプローチを示しているのだろうか。

ゲデスの関心を生涯にわたって貫いたもの、それは都市の進化と人間の成長との関係への関心であり、その両者をどのように統合すべきかという課題意識であった。

生物が環境との相互作用の過程で生じる変異によって進化を遂げるように、産業革命後の社会にとって普遍的な環境である都市と人間との相互作用の全体像をナチュラリストの目で理解し、その両者が破壊的な関係になる以前にあるべき関係を提示すること——それが彼の求めてやまなかったことであり、「都市の進化の秘密を解き明かす手法」の内実であった。彼は、そうした作業課題に「実践経済学」〔Practical Economics〕、「応用社会学としての市政学」〔Civics as Applied Sociology〕、「土地工学」〔Geotechnics〕とつけた名前をつけ、その解答へのヒントを求めて数多くの著名な科学者や社会事業家や教育家との親交を結んだのであった。

だが、それは未だ踏み慣らされていない道であった。否、何よりも社会学（ないし地理学）と都市計画学と教育学との境界領域をさまよう彼の関心のあり方が、それらの総合を求めるがゆえに専門諸科学に独自の方法を軽視する態度が、そしてしばしば明晰さを欠くむらの激しいその文体が、彼の足跡を容易には辿りがたいものにしてしまったのではなかっただろうか。現に、ルイス・マクフォードや生前直接彼と交流のあった人々をのぞけば、

今日に至るまで、彼に対する評価は、内外の教育学研究においてはもとより、決して高かったとは言えないだろう。⁽⁴⁾

本稿は、一九六〇年代半ば頃から内外で生じてきたゲデス再評価の機運、とりわけ近年なされてきた「イギリス環境教育の祖」として見直しへの示唆⁽⁵⁾に学んで、ゲデスの足跡、とりわけその理論的営為を「イギリス環境教育論の原型」として再評価しようとするものである。即ち、社会的(地理学的)知と都市計画的知と教育学的知とを総合せんとした彼の思考の軌跡は、一九世紀末から今世紀初めにかけて、「自然学習」〔Nature Study〕を環として都市の進化と人間の成長とを統合する理論——「教育計画と都市計画の総合の学としての環境教育論」——を形成していた、ということ⁽⁶⁾を明らかにすることが小論の課題である。

以下、Ⅱ節ではゲデスの環境教育論の基盤となった都市と人間(子ども)との関係についての彼の現状認識を整理し、Ⅲ節では彼の自然学習論の構造を検討し、Ⅳ節でまとめを行いたい。

Ⅱ

ゲデスが都市研究に着手した一八八〇年代は、チャールズ・ブースによって著名なロンドン調査が開始された時代であった。ゲデスはブースの仕事を重視しつつも、そこに「地理及び歴史に関する調査」が欠けていると批判し、それに対してJ・ラスキンに学んだアメニティ論とフランスのF・ルブレイに影響された社会学的方法との双方を基盤とすることによって、「都市の進化の秘密」に迫ろうとした。⁽⁸⁾

都市を一個の有機体ととらえるゲデスは、その進化の過程(就中その過程で過去から継承されたもの)に關心を注ぐと同時に、その現代的機能を「産業都市」(「旧技術都市」)、「専制都市」、「文化都市」の三種類に分類した。彼は、「産業都市」(及び「専制都市」)の観察からその社会問題(とりわけ生態学的問題)を引き出し、他方、「文化都市」の調査によって都市の発展の方向(彼⁽⁷⁾は将来の都市像を「新技術都市」として構想した)を見定めようとする。前者の関心は彼を社会学や地理学に引き寄せ、後者のそれはかのE・ハワードと並ぶ都市計画

の先駆者としての彼を準備することになるだろう。一九〇四年の七月に開かれたイギリス社会学会の例会で、彼が自らの「応用社会学としての市政学」を「社会調査の社会的事業への応用」と定義したのは、こうした課題意識によるものであった。

ところで、以上のような都市の過去と現在と未来へのゲデスの関心は、常に人間の問題、その発達の問題、とりわけ子どもの発達の問題と深く結びついていた。いま、その点にしばらく注目してみよう。

ゲデスは「今世紀前半のイギリス社会の進歩は、ほとんど純粹で機械的な発展であったために、おそろしく肥大化して人口過密となった町では、最も怠慢な者でさえ緊急に改善する必要がある身体的・道德的害悪が大量に生み出されざるをえなくなった」と述べ、「この後に来る者にも」以来のラスキンの社会批判に共感を示しつつ、都市の現状を次のように告発する。

「近代都市には、その富が——統計上は——どれほどものすごいものであるにせよ、掲げるべき最終生産物など結局何もない。あるものと言えば、外は見るとあわれで中は不健康であり、永続的な価値などみじんも

含まない貧弱な建てられ方をした住宅のうんざりするような集積ばかり。あとは至るところ、見るのも恐ろしい汚れや暗闇、煙や汚水でおおわれている。まるで、あたかも住民たちが生命とは短く陰鬱なものという考えに全くとりつかれてしまい、彼等が怠慢なためにそれに満足しきっているかのようだ。」

彼にとつて、「産業都市」とは「自然資源」と「われわれの一生の働き」とを浪費して生産された「塵埃や廢残物」の集積場であり、その結果産み出された「新たなコナベーションや町や疑似都市は、すべてまったく、否本質的に、スラム的——スラム的、半スラム的、超スラム的——性格のもの」であった。それは「全体として見れば一つのカコトビア（絶望郷）」であり、「それぞれのスラムの中では、その環境に対応する様々な型の人間の墮落が進んでいるのだ」——彼はそう主張したのだった。

ゲデスの視線は、さらに都市の子どもに注がれる。彼は、彼らを「産業都市の中に閉じ込められ、依然として支配的な（不自然で欠陥のある人間をつくり出す過程）の影響下にある」存在と見、その（過程）を、以下の二つの角度から検討の俎上にのせた。

彼はまず、都市から「自然」や「農村的諸条件」⁽¹⁴⁾が後退し、「子どもたちの成長すべき場」が「みすばらしくちっぽけな裏庭」や「陰気でがらんとした校庭」⁽¹⁵⁾に限定されている現実注目する。それは、例えば、一九世紀の半ばになされたオースマン市長の下でのバリ大改造への次のような批判に投影されている。

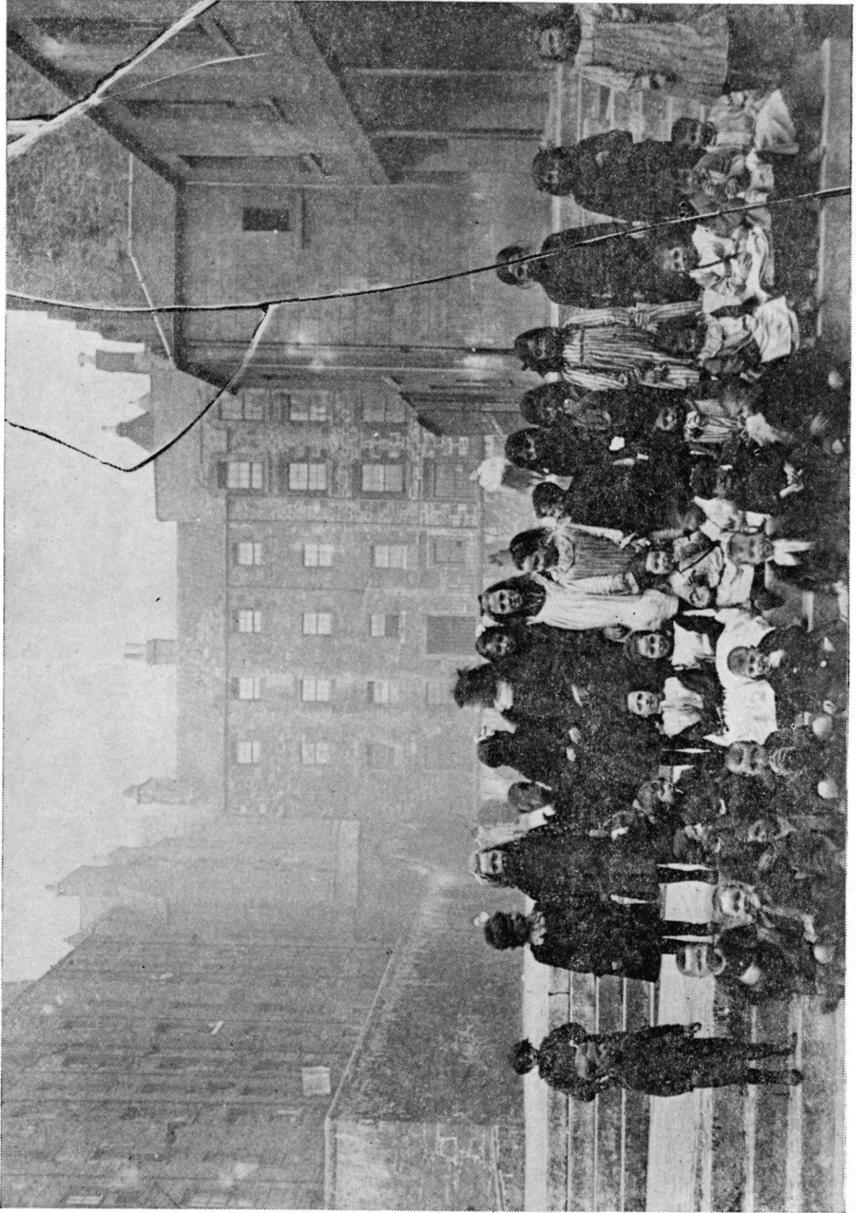
「人は、この都市とその健康統計とに通じてくるにつれて、ずっと広くなった通りや広々としている見せかけが、その内側にあつて見えなかつたゆつたりとした中庭や古い庭の喪失とひきかえに、高価な値段で買い取られたという事実⁽¹⁶⁾に思い至るだろう。というのは、通りの汚れた空気の中で遊ばなければならぬということ⁽¹⁶⁾が、都市の子どものひ弱さの何よりの原因だからである。」

このように、ゲデスは「依然として支配的」な「不自然で欠陥のある人間をつくりだす過程」の第一の要素として、都市における「子どもの活動空間（とくに遊び場）の減少・変貌」⁽¹⁷⁾をあげ、それが彼らの「ひ弱さ」や「生命力の衰え」の原因になっていると警告したのであった。ゲデスが注目するもう一つの要素は、学校教育の機

械化である。彼は、それを「荒れる子ども」に身を寄せながら、次のように告発している。

「『荒れる子ども』は、あまりにも長いあいだ罰と抑圧とによって処遇されてきた。だが、いまや我々は、彼は全く教育という名の機械の産物なのであり、その石のようなバンを食べて飢えやせてしまったのだ、と気づき始めているのである。」⁽¹⁸⁾

彼は、学校教育から子どもにとつての「様々な経験の機会」が失われ、逆に「練習」(「石のバン」!)が中心となつて注目に注目する。「我々の未熟な教育機構——上級学校には伝統が、下級学校には官僚制が充満している——」では、「学習者には無用の大部の述語集の他に、たくさんの冷えた塩づけにされた情報——しかもそのいくらかは腐っている——をもった教師」が、「その中の言葉を繰り返すことを第一の義務とするようになり」⁽²⁰⁾、「芸術は『様々な等級』に、科学は『様々な段階』に、手仕事は『様々な工作場実習』へと切り裂かれた——即ち、再びかつてのラテン語の文法と練習の変形物になつてしまった。」⁽²¹⁾その結果、「学校の少年たちや技術学校の生徒たちと信頼関係にある人ならば誰でもすぐに



気づくように、最も熟練した実際の授業は、その反復される練習に対する徹底的な嫌悪感をのぞけば、生徒たちの生活に対する大きな影響と言ってもほとんど何も残していない、というのが現実なのである⁽²³⁾と。こうした教育内容の「経験と現実」からの離反、子どもの関心からの遊離こそ現代教育の根本問題である、とゲデスは考えた。彼は、その背後に「ロバート・ロウ的な秩序の残存」、即ちロウによる「出来高払い制度」の導入（一八六二年）の影響を見てとっていた⁽²⁴⁾。

ゲデスは、以上の〈子どもの活動空間の減少・変貌〉と〈学校教育の機械化〉の双方が都市における「依然として支配的」な〈不自然で欠陥のある人間をつくりだす過程〉を規定しており、子どもの「生命力を浪費し、力や可能性を阻害する⁽²⁴⁾」元凶であると考えた。そして、それは彼にとって憂うべき問題であった。何故なら、「この過程の影響下にある子どもにとって、自然は奇妙でよそよそしいものとなっている⁽²⁵⁾」ように、その過程で形成された「不完全で成長を妨げられ退化した子どもと言うべきおとなたち⁽²⁶⁾」にとっては、都市の問題が「奇妙でよそよそしいものとなっている」、と彼には思われたからで

ある。

「我々の過去の教育は、あまりにも書物中心であったので、一〇人中九人、ときとして一〇人全員が現実より絵を、絵より活字をよりよく理解することになった。それゆえ、たとえブリテン諸島には数少ない美しい都市、わずかだがすばらしい街路——選ぶとすれば、オックスフォードの大通りやエディンバラの大通り——が残っているとしても、それらの二、三枚のよく選り抜かれた絵はがきの方が、向こうに大学と教会があり、こちらに宮殿、城、市のシンボルがあるような記念碑的美しさをもつその実際の景色よりも、大きな影響をほとんどの人々の心にもたらすことだらう。我々は、このような街路の美しさ、あるいはその生活と文化遺産の最上の要素に気づかないので、そこで悪化している要素にも気づかないのである⁽²⁷⁾」。

このようにゲデスは、一九世紀末から今世紀初めにかけてのイギリスの都市を観察し、そこに都市の諸装置の機能不全が人間（子ども）の成長を妨げ、彼らの成長を歪みがそれらの機能不全を助長する、という関係を見出した。その悪循環を断ち切って、都市の進化と人間の成

長を結びつける理論を展開すること——それがゲデスの次の課題となった。

III

一九〇四年に刊行された『都市の発展——公園、庭園、文化施設の研究——』の冒頭において、ゲデスは以下のように述べている。

「いまや世界は都市生活の新時代に入ろうとしている。そこでは、『進歩』はもはや単に富の量や人口の増加として記述されるのではなく、それらの質に左右されると考えられている。我々の一つ前の世代は、水の供給や下水設備等の何よりも必要な大仕事をやり遂げねばならなかった。初等教育もまた始められた。その結果、ある人々にとっては——そして当の先駆者たちにとつてさえ——我々の都市の発展がほぼ完全であるかのように思われるのかもしれない。だが、いまやよりいっそう健康な諸条件を確保したり、もっと快適で落ちついた諸条件を整えたりするなど、都市生活の新たな局面を切り開くことが焦眉の課題となっているのである。」⁽²⁸⁾

ゲデスは、オクタビア・ヒルやハワードらが始めた「アメニティの保護や、そのさらなる発展」⁽²⁹⁾によって「都市生活の新たな局面を切り開く」動きを「都市計画運動」ととらえるとともに、それが地理学や社会学といった自然と社会とについての総合的な科学の発展や、教育上の新たな実験（とくにカリキュラム改造）と結びついて、一つの大きな文化転換を起こしつつあると考えた。それに正しい方向づけを与えることによって都市の発展と人間の成長との統合を実現することこそ、彼のめざしたことであった。

では、「都市の発展」と「人間の成長」とをつなぐ環は何か——一八八〇年代以来、その回答を求めて彷徨してきたゲデスは、世紀転換期に至って一つの示唆を得る。それは、子どもたちへの初歩的な「自然の知識」の教授を目的として「自然学習」を推進しようとする学校内外の動きであった。

実際、既にエディンバラ夏期集会（一八八七年）において「教育への地域調査活動の導入」による「合理的な学習カリキュラムの調整と知識の統合に向けての実験的な試み」⁽³⁰⁾を行っていたゲデスは、一八九〇年代の末に

なると、地理学者のハーバートソンや植物学者のスマースとともに、エディンバラ北方の小都市ダンファームリンで、初等学校の生徒を対象とする自然観察会の組織化に乗り出している。ゲデスとその友人の生物学者トムソンのはたらきかけもあって、一八九九年にスコットランドで、一九〇〇年にイングリランドで、それぞれ自然学習が初等学校のカリキュラムの中に取り入れられることになると、彼はエディンバラやロンドンを中心に「教師のため⁽³²⁾の自然学習講習会」を毎年開催し、またロンドンのリージェンツ・パークでの「自然学習展」(一九〇二年)の準備や学校自然学習連盟の設立(一九〇五年)にも力を貸したのだった。

自然学習推進のためのゲデスのこうした諸活動は、イギリスにおける一九世紀末のカリキュラム改造運動——R・セレックの言う「出来高払い制度」の下での「旧教育」をつくりかえようとする「新教育」運動⁽³⁴⁾——の中から出て来た自然学習運動の一系譜として位置づけることができるだろう。ただ、彼の場合には、自然学習のカリキュラムの問題が、①自然と社会とを対象とする新たな科学の内容と結びつくことによって、②子どもの経験を

規定する環境全体へと拡張され、さらに進んでその改造(「都市計画」と結びつくことによって、〈教育計画と都市計画の総合の学としての環境教育論〉へと広がっていくことになる。

以下、彼の独特な自然学習論の構造を調べてみることにしよう。

自然学習を論じるにあたって、ゲデスはまず当時なされていた「自然学習」と「地理教育」をめぐる議論を二つながら批判することから出発する。曰く、「現在、自然の教師たちがあれこれの『方法』にあまりにも固執し、ときにお互いに対してあまりにも不寛容なのは、地理学的なパースペクティヴを失っていることによるのではないか?」、「地理教育に関してはこのうえなく優秀な議論がなされてきているにもかかわらず、その教科は、教育的には、再三にわたり失敗を繰り返してきた。……その何よりの原因は、今日幸せにも教育に取り入れられつつある生きた自然との直接的で具体的なふれあいが欠けていることにあるのではないか?」⁽³⁵⁾と。そこでゲデスは、一方で「自然学習(の内容)を地理学に発展させ」、他方「地理教育の基礎に自然を据える」⁽³⁶⁾ことを通して、自

然学習と地理教育とを統合し、それを彼の自然学習論の中核(目的論と内容・方法論)たらしめようと試みる。そのゲデス流の自然学習論の骨格を、一九〇二年から四年にかけての諸論稿をもとに再構成すると、以下のようになるだろう。

◆目的——ゲデスが自然学習を通して育てようとしたのは、「小さなナチュラルリスト」⁽³⁸⁾としての子どもである。「まずナチュラルリストになるのであって、地理学者ではない」⁽³⁹⁾と彼は強調する。ここで「ナチュラルリスト」とは、「屋外で、事実を目の前にして、書物も手助けもなく、独りで、全力を出して観察し、考える習慣を身につけた」⁽⁴⁰⁾人々のことを意味している。都市における〈活動空間の減少・変貌〉と〈学校教育の機械化〉という〈不自然で欠陥のある人間をつくり出す過程〉の下で生きることを余儀なくされている子どもに対して、「ナチュラルリストとしての生活をさせる」⁽⁴¹⁾ことを通して、「何ものにもとらわれず、責任のない自由」の中で、「目の前の光景の美しさや面白さに自然に集中」⁽⁴²⁾し、「『いま』『ここで』」いっそう充実した生を生きること⁽⁴³⁾をこそ教えねばならない。それが「ルソーによって予言され、ベスタロ

ッチとフレーベルによって実践された『自然への帰帰』⁽⁴³⁾の思想、「自然への、人間的自然への帰帰」⁽⁴⁴⁾の思想の実現なのだ——ゲデスはそう考えた。

◆内容と方法——さきに見たように、ゲデスの〈学校教育の機械化〉に対する批判は、何よりも子ども達の経験と現実から遊離したそのカリキュラムに向けられていた。それゆえ、彼の自然学習論も、それをどう改革するかが必然的に中心問題となる。

ゲデスにとって、「自然学習とは、既に縮詰め状態の科目表に咨意的に詰め込まれるべき新たな『教科』ではな」⁽⁴⁵⁾かった。それは、「物ごとを個別に考察・分析し、それを静止しているか死んだものとして静的に思考する形式ばった見方から、生き生きとした見方、あるいは運動的な見方——進化という運動するドラマの中で考察された、あらゆる研究を相互に関連づける総合——への転換」⁽⁴⁶⁾を示すものであり、その意味で「教育革命」⁽⁴⁷⁾をもたらずものである。彼は、このように自然学習を教育内容の総合化の中核をなすものであるとおさえ、そのうえでさらにその具体的な内容を、①自然の学習、②遊びと仕事の教育、③環境の学習、の三つの要素からなるもの

として構想した。

①自然の学習…まず、ゲデスは「教室を（自然）それ自体に対してあけ開き、生徒たちにその多様で生きた現実を直接知らせるべく、彼らを外に連れ出⁽⁴⁸⁾」そうと呼びかける。「田園の美しさ、変わったものや見慣れたものへの自然な興味、子どもたちが教師に対してではなく彼ら自身の心に対して出す質問——ここに自然学習と地理学⁽⁵⁰⁾の真の内実がある。」

「自然の学習」の第一歩としての「散歩と初歩的な観察・鑑賞」という課程で、ゲデスがとくに重視したのは子どもの「驚きの情感」や「感嘆⁽⁵¹⁾」であり、「審美眼」を育むための「感覚的教育」である。彼によれば、「例えば貝殻のように美しいもの」は、「我々の内部に感嘆と好奇心とが入り混じった新鮮な驚きの感情を引き起こす」が、「そのうち最初にやってくるのは感嘆である」という。「科学における問いと答えへと発展する好奇心」は、「それ自体としては好ましいもののだが、美の中心で感ずる無垢の喜びという束の間の樂園から、あまりにもしばしば我々を追い出してしまふ。」それに対して「感嘆」という「美（あるいは美術）の鑑賞によって培

われる感情の状態は、非実際的であるどころか、想像力によってこれらの印象が何か新しいものに再整理されるやいなや、まさに行動を準備することになるのである。⁽⁵³⁾」ゲデスは、こうした「ものの見方⁽⁵⁴⁾」を育成するために——しばしばラスキンの名を引きながら——子ども自身のリズムにあわせた自然の中の散歩や美の鑑賞・表現の教育を求めたのであった。

「自然に対する喜び」や「観察」から出発した「自然の学習」は、つづいて「観察結果を解釈し自然を問う活動的な知性⁽⁵⁵⁾」の教育、即ち「地域調査活動」へと発展させられる。ここでゲデスは、求められる地域調査の典型として、「たいへんおしまれつつ世を去ったロバート・スミスによって創始された尊敬すべき植物地理学上の仕事⁽⁵⁶⁾」を挙げた。「その仕事は、兄のW・G・スミス博士やマーセル・ハーディ氏その他の有能で情熱的な人々の手に委ねられているが、その推進者が望んでいた通り、フランスや他の諸国の調査と相互に関係を保ちつつ、ブリテン諸島の全体的な調査を開始するものとなっている⁽⁵⁷⁾。」ユニバーシティ・カレッジ・ダンディでゲデスの助手を勤めていたロバート・スミスが、その「スコット

ランドの植物学調査⁽⁵⁸⁾によって「近代イギリス植物生態学の先駆的な仕事をなした」⁽⁵⁹⁾(A・タンズレー)とされ、またその仕事を継いだW・G・スミスやハーディらによって一九〇五年にイギリス植生委員会(イギリス生態学会「一九一三年設立」の母体)が組織されたことを考えれば、ここでゲデスが「自然の学習」の到達点としての地域調査活動に求めたのは「生態学の学習」⁽⁶¹⁾であった、と云うことができるだろう。

②遊びと仕事の教育…ゲデスは、一八九九年と一九〇〇年との二度にわたるアメリカ訪問で、当地の「新教育」の理論家たち——とりわけ「シカゴにおけるパーカー大佐の仕事とデューイ教授の仕事」——の影響を受け、同時に「ルブレイと彼の職業地理学派(ドモラン、ハットン、ハーバートソン)」の「基礎的な職業」への注目⁽⁶³⁾に触発されることによって、原始時代から今日までの人類の労働の発展を追体験する「基礎的な職業の繰り返し」が「ひらけゆく未来の主要な教育の資源・方法と見なされ始めている」⁽⁶⁴⁾と考えるに至った。この問題については、例えば「最も単純な鋤仕事から最も複雑な造園、最も技巧的な果樹栽培まで、あらゆる形態の農村労働を

行い、またそれに対応する科学的訓練を行うこと」といった示唆がなされ、またそれに対応する農園や労働博物館の構想もなされた(次項参照)が、教育の内容及び方法についての展開は進まなかった。これは、ゲデスにとって「基礎的な職業」(の保全)の問題が「文化都市」や「田園都市」等の計画——その理論的基礎としての「土地工学」⁽⁶⁶⁾——と不可分のものであり、むしろその方向で考察が進んだことを示していると思われる。

③環境の学習…ゲデスの自然学習論の最後には、都市社会を含む人間環境全体の調査・構想へと発展する「初歩的な環境の学習」が位置づけられていたが、これもまた実際にはほとんど展開されなかった。彼がそれを「自然学習の完成としての都市学習」[Town Study]ととらえ、教育の場での地域調査活動の到達点とみなすに至るのは、彼自身都市調査の経験を積み重ね、また都市計画運動も高揚期を迎える一九一〇年代のことであった。⁽⁶⁸⁾

◆施設——以上の三つの領域からなる自然学習は、「獲得しうる限り最も完成された環境に対する作用と反作用を通してなされる」⁽⁶⁹⁾とゲデスは言う。即ちそれは、第一次的には、学校の教室ではなく、野外のフイー

ルドや博物館等の諸施設で行われることになる。「自然学習の施設」への彼の関心が、ここに生じてくる。

ゲデスの「自然学習の施設」論が最も包括的に叙述されているのは、ダンファームリンのカーネギー財団の委嘱を受けてまとめられた前述の『都市の発展』である。ここでの彼の基本的な姿勢は、第二章「本計画の教育的意義」の次の一節に集約されていると言つてよいだろう。

「子どもが幼少の頃、家庭や遊び場、庭や野原といった身近な環境から、あるいは空気や大地や水との自然なふれあいによって、深く永続的な影響を刻みつけられるということは全く明らかなことだ。そして、手に入れうる最良の環境への子どもの具体的な権利を我々が十分に認識せねばならない理由も、まさにそこにあるのである。」⁽⁷⁰⁾

『都市の発展』は、このような「教育環境権」思想に立つ「都市の文化資源」の計画論であり、そこで彼は、子どもの遊び場から運動場、美術館、博物館まで、様々な文化施設の配置を、その「教育的利用」を前提として、構想した。⁽⁷¹⁾

例えば彼は、「自然の学習」を子どもたちの散歩から始めようと説いたが、ここでは岩石庭園に「ところどころに水たまりや低木の群落があり、ほとんど三分の一マイルに及ぶ広いまがりくねった岩の道」を築くことによつて、彼らが「次々に変化し新鮮な眺めと興味」を得る機会を確保しようとする。また、「仕事の教育」においては「基礎的な職業の繰り返し」に重点が置かれたが、本報告書では「初期の人類の住居」⁽⁷⁴⁾を子どもたち自身につくらせたり、「原始時代から今日に至るまでの様々な文明の進歩」を人々の目の前に提示する「労働博物館」の設置が提案されている。その他、とくにゲデスは、「我々自身の国ではまだ揺籃期にある学校園」⁽⁷⁶⁾や「自然それ自体を、その最も特徴的な局面と地域の中で示そうとする博物館」⁽⁷⁷⁾を重視したのであった。

◆担い手——ゲデスは、自然学習を推進するためには教師の再教育が不可欠であると考え、そのための講習会の開催や自らの夜間の講義の開放など、積極的な施策を行った。だが、自然学習の広い領域は、もとより教師一人で担いきれるものではない。そこには「遊びのリーダー」⁽⁷⁸⁾も「教師の役割を果たしうる園芸家」⁽⁷⁹⁾も「家禽の専

「⁽⁸⁰⁾ 門家」も必要である。そこでゲデスが注目したのは、ナショナル・トラストやエディンバラ・コバーン協会のような環境保護団体から地域のナチュラリスト協会のような学芸団体に至る、共通の志と趣味で結ばれた地域諸組織の教育的機能である。⁽⁸¹⁾

彼は、とくに地域のナチュラリストたちの組織を重視する。⁽⁸²⁾ というのは——彼によれば——その活動は「これまでではほとんど全く科学に関するもの」だったが、「(産業化・都市化の時代を経た)現在では、教育——その最も広い意味での、子どもから市民に至るあらゆる段階での——に関するものとなっている」からである。そこで彼は、ナチュラリスト協会が、観察会等による子どもの自然学習の促進、会員自身による地域調査の推進⁽⁸³⁾、博物館等の文化資源の管理と運営⁽⁸⁴⁾、を担うことを求め、さらに、教師たちがこうした協会に参加し、「社会に関する知識と社会への理想を実際に生活を改良するために応用する」⁽⁸⁷⁾ よう呼びかけたのであった。

以上が、ゲデス自然学習論の骨格である。

IV

ゲデスの自然学習論は、このようにへ教育計画と都市計画の総合の学としての環境教育論」という形をとった。それは、都市を人間(とくに子ども)の形成のための基本的な条件と考え、その両者の望ましい関係を求めて社会学的(地理学的)知と都市計画的知と教育学的知を総合せんとする試みであった。

当時、「初歩的な自然の知識の教授」の初等教育への導入にともなつて、それを推進せんとする視学官や自然科学者、教員養成学校の教師たちの多くは、もっぱら「自然の何をどう教えるか」をめぐって議論を繰り広げていた。それに対してゲデスは、教育の諸過程の環境による規定を見すえた上で、自然学習を環として教育計画と都市計画とを総合することを企図したのであった。⁽⁸⁸⁾ 人間の発達における環境の形成力を重視し、世代の再生産のために良好な環境を人間が自ら維持しうる能力を培うことを課題として、環境の総合学習とそのための条件整備を求めるこの彼の理論は、社会学的教育論のイギリスにおける一つのあり方を示すものだろう。それはユニーク

なブローチであった。だが、「イギリス環境教育論の原型」はその独自性の中に胚胎し、今日その再評価を求めようのである。

ナチスの文藝を引用する際には、以上の警告を引用したイース (邦語訳がある場合は「」内の引用イース) の必要はない。

- * JR——*John Ruskin: Economist*, William Brown, 1884, reprinted by Folcroft Library Editions in 1973.
- * CO——*Co-operation versus Socialism*, Manchester Co-operative Printing Company, 1888.
- * NS——'Nature study and geographical education', *The Scottish Geographical Magazine*, Vol. XVIII, 1902.
- * NW——'A naturalists' society and its work: an address to the introductory meeting of the Dunfermline Naturalists' Society', *The Scottish Geographical Magazine*, Vol. XIX, 1903.
- * FN——'The facilities for nature study', *Official Report of the Nature-Study Exhibition and Conferences*, Blackie & Son, 1903.
- * CD——*City Development: A Study of Parks, Gardens and Culture Institutes*, Patrick Geddes and Colleagues, 1904.
- * SY——*Syllabus of Introductory Course on Nature*

Study and Geography in Education, Outlook Tower, 1904.

* CV——'Civics: as applied sociology', *Sociological Papers*, Vol. I, Macmillan, 1905.

* OS——*Syllabus of Introductory Course on "The Outlook of the Sciences: Nature Study and Geography in Education"*, London County Council, 1906.

* CS——'City deterioration and the need of city survey', *The Annals of the American Academy of Political and Social Science*, Vol. 34, 1909.

* CE——*Cities in Evolution: An Introduction to the Town Planning Movement and the Study of Cities*, Williams & Norgate, 1915, reprinted by Earnest Benn in 1968, 『都市の誕生』 原案 | 朗徳誠 | 鹿嶋田政彦 | 一九二二年。

* ET——'The education of two boys', *Survey*, September 1925.

(1) 藤岡貞彦「教育権と環境権」同『教育の計画化』総合労働研究所、一九七七年、所収。

(2) CE: 314 [275].

(3) ナチスの雑誌に關する記載は、次の通りである。
Philip Boardman, *The Worlds of Patrick Geddes: Biologist, Town Planner, Re-educator, Peace-warrior*, Rout-

ledge and Kegan Paul, 1978.

- (4) 「教育(理論)家」としての彼のイギリス教育史に与ける位置づけは、フヘンソート・スノウの創始者C・J・ブリューに於ける思想的影響をなすもの(例として、W. A. C. Stewart, *Progressives and Radicals in English Education: 1750—1970*, Augustus M. Kelley, 1972)「スコットランドの成人教育史において果たした役割をみるもの(例として、Thomas Kelly, *A History of Adult Education in Great Britain*, Liverpool University Press, 1970)」※其本ではあると思わざる。

- (5) Keith Wheeler, 'The genesis of environmental education', George Martin & Keith Wheeler eds, *Insights into Environmental Education*, Oliver & Boyd, 1975. 藤岡貞彦「日本における環境学習の成立」『福島要一編『環境教育の理論と実践』あゆみ出版、一九八五年。なお、一九世紀の末以来農村学習(Rural Studies)の伝統の強いイギリスでは、環境教育の起源をその歴史的文脈の中で見てらこうとする立場もある。例えば、Ivor Goodson, *School Subjects and Curriculum Change: Case Studies in Curriculum History*, Groom Helm, 1983, を参照。

- (6) 歴史家のヘレン・メラは「近著『ストリックランド・ゲデス——社会進化論者、都市の計画家——』において、ゲデスが抱いていた「教育計画と都市計画の総合」という構想を、「ゲデスのアキレス腱」ないし「彼が決して解決しな

かったトランプト」を述べらる(Helen Meller, *Patrick Geddes: Social Evolutionist and City Planner*, Routledge, 1990, pp. 135, 174)。

- (7) CS: 59.
- (8) ゲデスはあわめて個性的な人間であったが、その思想の形成にあたっては、とくにジョン・ラスキンと(E・ドラモンを介して)フレデリック・ルブレイの影響を強く受けたと思われる。その思想と学問の継承関係についての検討は「他日を期した」。

- (9) CV: 104.
- (10) CD: 14.
- (11) JR: 36-37.
- (12) CE: 74-75 [85].
- (13) NS: 534.
- (14) CD: 216.
- (15) CE: 116 [119].
- (16) CD: 11-12.
- (17) CD: 216.
- (18) CD: 80.
- (19) CD: 169.
- (20) NS: 530.
- (21) CD: 122.
- (22) CD: 122.
- (23) CD: 142. なお「スコットランドでは、一八七三年の

- 「独立学校令」ビヤップ「出来高抄」の制度」が導入された
 59 (James Scotland, *The History of Scottish Education*, Vol. 2, University of London Press, 1969, p. 62)°
- (24) CD: 216.
- (25) NS: 534.
- (26) NS: 530.
- (27) CE: 16 [40].
- (28) CD: 2.
- (28) CD: 1.
- (29) Victor Branford, 'Edinburgh Summer Meeting', *The Positivist Review*, 1 December 1893, p. 219.
- (25) Henry Beveridge, 'School excursions in Scotland', *The Geographical Teacher*, Vol. 2, 1902, p. 1.
- (22) Boardman, op. cit., p. 196.
- (23) 一連の講座の第一回とシブ「ゲテスは、一八九九年の十月に、当時L・H・インリーと名にアメリカ自然学協会のリーダーであったW・の・ジャックマン (シカゴ大学) をロンドンに招き、「自然学協——学校での実践に於けるその方法と結果」と題する講演会を開催した事 (Printed circular advertising a conference on Nature Study, Outlook Tower, October 1899, University of Strathclyde, Sir Patrick Geddes Papers, T-GED: 18/2/14/1)°
- (25) R. J. W. Selleck, *The New Education: The English Background, 1870—1914*, Sir Issac Pitman, 1968. 本書の二二一—二三二頁には、ゲテスの関心を抱いていた (CD: 64) L・G・ハービーら農業教育委員会周辺の人々による自然学協会の取り組みが紹介されているが、ゲテスその人の言及は見られない。
- (25) NS: 527-528.
- (26) NS: 528.
- (27) ゲテスは一九〇二年の八月にケンブリッジの夏期集会で自然学協講座を担当した後、「ジャックマンや地質学者のローネ (ダブリン科学大学) に宛じた手紙で、「この講義を自然学協に関する十分な本じまのめちる」というトナハを述べた (Patrick Geddes to Wilbur S. Jackman, 28 August 1902, National Library of Scotland, Geddes Papers, MS: 10510, f. 218; Patrick Geddes to Grenville A. J. Cole, 8 May 1903, University of Strathclyde, Sir Patrick Geddes Papers, T-GED: 9/4/70)°。実際、ゲテスはケンブリッジでの講義の草稿をタイプで打ち直した事、その本のとりまの作業を行なったと思われる (Course of lectures on Nature Study at Cambridge Summer Meeting, MS & TS, 1902, University of Strathclyde, Sir Patrick Geddes Papers, T-GED: 18/1/196)° 結果としてその構想は実現した。
- (28) NS: 527.
- (28) NS: 528.

- (40) NS : 528.
 (41) CD : 122.
 (42) NS : 528.
 (43) FN : 112, NS : 536.
 (44) CD : 169.
 (45) SY : 2.
 (46) CD : 178.
 (47) SY : 2.
 (48) ゲデスは「ちぎのシヤウインに宛てた手紙で次のように記した。「(自然学習の)方法に関する議論について言えば、私は、ホッジ教授や他の友人・批評家諸賢を尊敬しつつも、あなたの相互関係的な方法と私が展望塔で実践している同様の方法こそ、たしかに他のあらゆるものを含めて最も包括的であるがゆえに、最も将来性があると確信している。」(Geddes to Jackman, op. cit.)
- (49) NS : 527.
 (50) NS : 528.
 (51) NS : 529.
 (52) NS : 530.
 (53) CD : 168-169.
 (54) NS : 531.
 (55) NS : 532.
 (56) NS : 533.
 (57) NS : 533.

- (88) Robert Smith, 'Botanical Survey of Scotland, I, Edinburgh district', *The Scottish Geographical Magazine*, Vol. XVI, 1900.
 (89) Arthur Tansley, 'The early history of modern plant ecology in Britain', *Journal of Ecology*, Vol. 35, 1947, p. 131.
 (90) John Sheail, *Seventy-Five Years in Ecology: The British Ecological Society*, Blackwell Scientific Publications, 1987, pp. 6-10. Robert McIntosh, *The Background of Ecology: Concepts and Theory*, Cambridge University Press, 1985, pp. 45-46. 『生態学・概念と理論の歴史』大串隆之他訳、思索社、一九八九年、七五—七八頁。
 (91) ゲデスは「一九〇四年の春にロンドンで開催した講座「自然学習——植物の自然誌——」に基いて「生態学研究」*ET*」との講義を行った (Syllabus of a course of ten lectures on *Natural History of Plants*, London County Council, 1904, University of Strathclyde, Sir Patrick Geddes Papers, T-GED : 18/1/225/2)。なお、ヘンリーは「早くも一八九九年に、トインビー・ホールでの大学拡張講座で生態学の講義を行った」とも (Tansley, op. cit., p. 130)。
- (8) ET : 574.
 (9) SY : 4.
 (7) NS : 535.

- (65) CD: 219.
 (66) NS: 535.
 (67) SY: 5-6.
 (68) CE: 334 [291].
 (69) CD: 123.
 (70) CD: 179.
 (71) CD: 213-214.
 (72) この『都市の発展』について、緑地学者の佐藤昌は次のように述べている。「ゲデスの考えでは、公園というものは、市民生活の中で他の都市施設と連繋してこそ効果を發揮するものである」という事であって、之が為め野外民俗博物館がある事によって町の歴史や性格を市民が知る様になり、又自然科学の興味も公園の中で起こすべきであるというものであった。この考えは公園の使命に新生面を開いたといっても差支えなかった。」(佐藤『欧米公園緑地発達史』、都市計画研究所、一九六八年、七〇頁)
- (73) CD: 57.
 (74) CD: 121.
 (75) CD: 125.
 (76) CD: 64.
 (77) CD: 112.
 (78) CD: 43.
 (79) CD: 61.
 (80) CD: 79.
- (81) CD: 225.
 (82) 一八八一年以来バースシャー自然科学協会(一八六七
 年設立)の通信会員であったゲデスは、同協会の活動をモデルとして、ダンファームリン・ナチュラリスト協会の設立(一九〇二年)を援助した(NW: 89)。この協会の初代書記であったローダー技術学校の教師R・サマヴィルは、後に「本協会は、今日の教育革命に示されている〈自然〉に対する生き生きとした関心の復興から誕生した」と言っていたらう」と述べている(Robert Somerville, 'Dunfermline Naturalists' Society', *Dunfermline Quarterly Record*, October 1908, p. 12)。
 (83) NW: 145.
 (84) CD: 119.
 (85) NW: 146.
 (86) CD: 119.
 (87) CD: 226.
 (88) ゲデスの自然学習論と学校自然学習連盟に集った他の論者の理論との厳密な比較については、他日を期したい。ここでは、同連盟が一九〇八年に発行した『自然学習に関する文献リスト』(*List of Books on Nature Study*, The School Nature Study Union, Publication No. 3, 3rd edition, 1908, University of Strathclyde, Sir Patrick Geddes Papers, T-GED: 18/3/417/2)に「理論と方法に関するもの」として掲げられている文献を、参考までに紹

- 介しておこう(十印は「特に推薦」と記されているもの。刊行年が明らかでない文献については「」内に記した)。
- Adamson, J. W. ed., *Practice of Instruction*, [1907].
 - Bailey, L. H., *The Nature Study Idea*, [1903].
 - Dearness, J., *The Nature Study Course, with suggestions for Teaching it*.
 - Dymond, T. S., *Suggestions on Rural Education, with Specimen Courses of Nature Study*.
 - Hodge, C. F., *Nature Study and Life*, [1902].
- † Kappa. *Let Youth but know*.
- Miall, L. C., *Thirty Years of Teaching*, [1897].
 - *Official Report of the Nature-Study Exhibition*, [1903].
 - † Scott, C. B., *Nature Study and the Child*.
 - Thomson, J. A., *Some Suggestions to Teachers for Seasonal Nature Study in Schools*, [1908].

なお、ゲデスは一九〇六年にロンドンで開催した講座「諸科学の展望——自然学習と地理の教育への入門」の要綱において、自然学習の教育学的理論を扱った文献の中で「推薦されるべき最も重要なもの」として、S・ホルルの序文の付いたホッミンの *Nature Study and Life* を挙げていた(OS: 11)°。

(88) 中内敏夫『教育学第一歩』岩波書店、一九八八年、二〇四—二〇五頁。

* 六一頁の写真によつて——『セント・アン学校の校庭にて』。一八九〇年代から今世紀初めにかけて、ゲデス本人もしくはその友人によつて撮影されたものと推定されている(提供: Photographic Archives, Patrick Geddes Centre for Planning Studies, Outlook Tower, Edinburgh)°
(中央大学兼任講師)